



大いなる悩みの時

未曾有の大災害の続発

大争闘シリーズ No.11



大争闘シリーズ No.11

大いなる悩みの時

未曾有の大災害の続発

(キリストとサタンの大争闘 39 章)

目次

Contents

恩恵期間の終わり	1
<small>ぞうお</small> 憎悪と迫害	4
ヤコブの悩みの時	8
恐るべき苦悩	12
金は火で練られる	17
我々に必要なもの	21
準備するのは今	24
最後を飾る大欺瞞	27
危機迫る	31
恐るべき災い	35
神の保護の約束	40
悩みの時の信仰	43
天使による守り	46
神の民の勝利	49

はじめに

未曾有の大災害が来る前に、愛の神は、どんな形で人々を用意なさるのであろうか。人類の恩恵期間が閉じられると、どんな恐ろしいことが地上に起こるか。神の民は、この全能者の影に宿るか、どれほど完全に守られるだろうか。この悩み、最大の迫害の時に守られる人々は、どんな状態になっているだろうか。この時もはや天の仲保者はいなくなる。

悔い改めて神に立ち帰ることは不可能である。「欺瞞中最大の欺瞞は」何であろうか。この厳しい試練を乗り越えて生き残る人々は、「特別な経験」をするであろう。

恩恵期間の終わり

「その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます」(ダニエル 12:1)。



第三天使の使命が閉じられると、もはや地上の罪深い住民のためのキリストの執り成しはなされない。神の民はその働きを完成した。彼らは「後の雨」「主のみ前から」来る「慰め」を受けて、自分たちに降りかかる試練の時に對し、準備ができた。天使たちは、天をあちらこちらへと急ぎまわっている。一人の天使が地上から

帰ってきて、自分の働きが終わったことを報告する。すなわち、最後の試みが世界に臨み、神の戒めに忠実であることを示した者はみな、「生ける神の印」を受けたのである。その時イエスは、天の聖所での執り成しをやめられる。イエスはご自分の手をあげて、大声で「事はすでに成った」と仰せになる。そして、イエスが「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」と厳粛に宣言されるとき、天使の全軍はその冠をぬぐ（黙示録 22:11）。ここに全人類の運命は、生か死かのいずれかに決定した。すでにキリストはご自分の民のために贖いをなされ、彼らの罪を消し去られた。主の民の数は満たされ「国と主権と全天下の国々の権威」とは、今まさに救いを相続する者に与えられようとしており、イエスは王の王、主の主として統治されるのである。

イエスが聖所を去られると、地上の住民に暗黒が覆いかぶさる。その恐ろしい時に、義人は仲保者なしに聖なる神のみ前に生きなければならない。悪人の活動を抑制していた神のみ手が除かれ、つい



にサタンは最後まで悔い改めない者を完全に支配する。神の忍耐は終わった。世界は神のあわれみを拒み、その愛を軽蔑し、その律法を踏みこじってきた。悪人は恩恵期間の限界を超えた。頑強に拒まれてきた神のみ霊は、ついに取り去られた。彼らは神の恵みの守りを失って、サタンに対する防備が全くない。その時サタンは、地上の住民を大いなる最後の悩みに投げ入れる。神の天使たちが人間の激情の激しい風を抑えるのをやめると、あらゆる種類の争闘が生じる。全世界は、昔のエルサレムに臨んだもの

よりももっと恐ろしい破滅に巻き込まれる。

ただ一人の天使が、エジプト人の長子をみな殺しにして、國中を嘆きで満たした。ダビデが民を数えて、神に背いたとき、一人の天使が恐ろしい破滅を引き起こして、彼の罪を罰した。神がお命じになるときに、聖天使たちによって行使されるのと同じ破壊力が、神のお許しになるときには悪天使たちによっても行使される。悪の勢力は今や準備されていて、あらゆるところに荒廃を広げようと、神の許しを待つばかりである。

ぞうお 憎悪と迫害

神の律法を重んじる人々は、世に災いをもたらす者として非難されてきた。そして彼らは、地球を災いで満たしている恐ろしい自然の猛威と人間どうしの争闘と流血の原因と見なされる。最後の警告に伴う力が、悪人たちを激怒さ

せた。彼らの怒りはメッセージを受け入れたすべての人に向かって燃え上がり、サタンは憎悪と迫害の精神をいっそう強くあおりたてる。

かつて、神のご臨在が最終的にユダヤ民族から取り去られたとき、祭司や民はそれを知らなかった。サタンの支配下にあって、最も恐ろしい悪意に満ちた激情に支配されながら、彼らはなお自分たちが神に選ばれた者であると考えていた。神殿における奉仕は続けられ、犠牲は汚れた祭壇にささげられていた。神の愛されたみ子の血を流すという罪を犯し、そのしもべたちや使徒たちを殺そうとする民に、神の祝福が毎日求められていた。同じように、聖所での取り消すことのできない判決が発表され、世界の運命が永遠に定まっても、地上の住民はそれを知らないで



あろう。依然として宗教上の種々の儀式は、神の霊が最終的に取り去られてしまった人々によって継続される。そして、悪の君が自分の悪巧みを成し遂げるために彼らに吹き込む悪魔的な熱心さは、神に対する熱心さと似ているであろう。

安息日がキリスト教界全体の特別な論争点となり、宗教と政治の当局者が結束して日曜日遵守を強要するとき、少数の者は、世間の要求に服従することを断固として拒むため、全世界の呪いの的となる。教会の制度や国家の法律に反対して立つ少数者は許すべからざる者であり、全世界が混乱と無秩序に陥るよりは、彼らが苦しみを受ける方がよいと主張されるであろう。これと同じ言葉が、1800年前（注・著者の執筆当時から）に、「民の役人たち」によってキリストに向かって発せられた。狡猾なカヤパは、「ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないようにするのがわたしたちに

とって得だ」と言った（ヨハネ 11:50）。この議論は決定的なものに思われ、ついに、第四条の戒めにある安息日を聖とする者に対して法令が発せられ、彼らは最も重い刑罰に相当する者として非難される。あげくのはてに、一定期間の後には彼らを殺してもよい自由が民衆に与えられる。旧世界におけるカトリック教と新世界における背教的プロテスタントとは、神のすべての戒めを尊ぶ人々に対して、同様な態度に出るであろう。

そのとき神の民は、ヤコブの悩みの時として預言者によって描かれている悩みと苦しみの場面に投げ入れられる。「主はこう仰せられる、われわれはおののきの声を聞いた。恐れがあり、平安はない。……なぜ、どの人の顔色も青く変っているのか。悲しいかな、その日は大いなる日であって、それに比べるべき日はない。それはヤコブの悩みの時である。しかし彼はそれから救い出される」（エレミヤ 30:5-7）。

ヤコブの悩みの時

エサウの手からの救出を熱心に祈り求めたヤコブの苦悶くもんの夜（創世記 32:24-30 参照）は、悩みの時の神の民の経験をあらわしている。ヤコブは、エサウに与えられることになっていた父の祝福ぎまんを欺瞞ぎまんによって得たために、兄の恐ろしい脅迫におびえて、命からがら逃げ出したのであった。彼は長年にわたる流浪の後、神の命令のままに、妻子と家畜を伴い故郷へと出発した。国境に着いたとき、彼は、エサウが復讐ふくしゅうの念に燃えて、勇士の一隊を率いて近づいているとの報告を受けて、恐怖に満たされた。ヤコブの一族は、武装もなく防備もないので、暴力と虐殺の無惨な犠牲になるかと思われた。この時ヤコブは、不安と恐怖に



襲われた上に、重苦しい自責の念にかられた。なぜならば、このような危機をもたらしたのは彼自身の罪であったからである。彼にとって残された唯一の希望は、神のあわれみにすぎることであった。彼の唯一の防備は、祈りでなければならなかった。しかもなお、彼は兄に対して犯した悪の償いのためと切迫した危険を免れるために、自分としてなすべき事はすべて行った。これと同様に、キリスト者も、悩みの時に近づくにつれて、人々の前で自分たちの立場を明らかにし、偏見を取り去り、そして良心の自由を脅かす危険を避けるために、全力を尽くさなければならぬ。

ヤコブは、家族の者が自分の苦悩を目撃することがないように、彼らを送り出してから、神と和らぐために一人残った。この時、彼は自分の罪を告白した。また、彼に対する神のあわれみを感謝するとともに、深くへりくだった心で、彼の先祖に与えられた契約と、ベテルにおける

夜の幻の中で、また流浪の地において、彼に与えられた約束とが行われるように嘆願した。彼の生涯の危機がやってきていた。すべてが危うくなった。暗黒と孤独の中で、彼は神の前にへりくだって祈り続けた。突如として、一つの手が彼の肩に置かれた。彼は、敵が彼の生命を奪うために来たのだと考えた。彼は必死になって敵と戦う。夜が明けようとする時、この見知らぬ人は超人的な力をあらわす。彼が触れると、頑強なヤコブは麻痺したようになる。そしてヤコブは力を失って倒れ、この不思議な敵の首にすがって、涙ながらに懇願する。ヤコブは、今、自分と争っているお方が、契約の天使であることを知る。彼は体の自由を失い、激しい痛みを感



じながらも、彼の願いを放棄しない。彼は自分の罪のために、長い間悩み、自責の念にかられ、苦しみに耐えてきた。今や彼は、それがゆるされたとの確証を得なければならなかった。天からの尊い訪問者は、今にも立ち去ろうとするように見える。しかしヤコブは、彼にすがって祝福を求める。天使は、「夜が明けるからわたしを去らせてください」と言うが、ヤコブは、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と叫ぶのである。何という確信、何という堅忍不拔の精神が、ここにあらわされていることであろう。もしもこれが、高慢でせんえつ僭越な要求であったならば、ヤコブは直ちに滅ぼされたことであろう。しかし彼の要求は、自分の弱さと無価値なことを告白しながらも、契約を果たされる神のあわれみに信頼する者の確信であった。

「彼は天の使と争って勝」った（ホセア 12:4）。この罪深く、誤りを犯した人間は、へ

りくだりと悔い改めと自己放棄とによって、天の君と闘って勝ったのである。彼はその震える手で、神の約束をしっかりとつかんだ。そのとき、無限の愛のお方は、罪人の懇願を退けることがおできにならなかった。彼の勝利の証として、また彼の模範にならう他の人々への励ましのしるしとして、彼の名が、彼の罪を思い起こさせるものから、彼の勝利を記念するものへと変えられた。ヤコブが神と争って勝ったということは、彼が人に対しても勝ちを得るという保証であった。彼はもはや兄のエサウの怒りに直面することを恐れなかった。なぜなら、主が彼の防御だからであった。

恐るべき苦悩

サタンは、神の天使たちの前でヤコブのことを訴え、当然彼は、その犯した罪のために滅ぼされるべき者であると主張し、エサウを動かし、

軍勢を率いて彼の方へと向かわせた。ヤコブの長い苦闘の夜の間、サタンは、彼に自分の罪を思い起こさせて、失望に陥



れ、彼が神にすがっているその手を引き離そうとした。ヤコブはほとんど絶望しそうになった。しかし彼は、天からの特別な助けがないならば自分は滅びるしかないことを知っていた。彼は真心から自分の犯した大罪を悔い改め、ひたすら神のあわれみを乞い求めた。彼はその目的を捨てようとはせず、しっかりと天の使いを捉え、苦悶の叫びをあげて熱烈に懇願し、ついに勝利したのであった。

この時、サタンがエサウを動かしてヤコブに立ち向かわせたように、彼は、最後の悩みの時にも悪人たちを扇動して神の民を滅ぼそうとするのである。そして彼は、ヤコブを訴えたよう

に、しきりに神の民を訴える。彼は、世界は自分の手中にあると考えている。しかし神の戒めを守る小さな群れが、彼の主権に反抗しているのである。もし彼が、この一団の者を地上から一掃することができるならば、彼の勝利は完全なものとなる。彼は、天使が彼らを守っているのを見て、彼らの罪が許されたことを推測するが、彼らの調査が天の聖所において決定されたことは知らない。サタンは自分が、彼らを誘惑して犯させた罪を正確に知っているので、それらを神の前に大きく誇張して示し、自分がかつて神の恵みから見離されたように、当然彼らも見離されるべきであると主張する。主が、彼らだけを許し、サタンと自分の部下たちを滅ぼすことは不公平もはなはだしいと、彼は抗議する。またサタンは彼らを当然自分の餌食であると主張し、滅ぼすために自分の手に渡されるべきであると要求する。

サタンが、神の民をその罪のゆえに責めると

きに、主はサタンが、彼らを極限まで試みることを許される。神に対する彼らの信頼、彼らの信仰と堅実さとが、激しく試みられる。彼らは、過去をふりかえる時、その全生涯の中にほとんど善を見ることができないため、望みを失ってしまう。彼らは自分たちの弱さと無価値とを十分に自覚している。サタンは、彼らの状態は絶望的で、彼らの汚れたしみは洗い去ることができないと思わせて、彼らを恐怖に陥れようとする。サタンは彼らの信仰をくじいて、彼らを彼の誘惑に負けさせ、神に対する忠誠を放棄させようと望むのである。

神の民は、彼らを滅ぼそうとする敵によって包囲されるが、彼らの味わう苦悶は、真理のために受ける迫害に対しての恐怖ではない。彼らはむしろ、自分たちの犯した罪の中に、悔い改めていないものがありはしないか、また自分たちの中の何らかの過ちによって「全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう」

とのみ言葉の成就を妨げるのではないか、ということをおそれるのである（黙示録 3:10）。もし彼らが、ゆるしの確証を持つことができるならば、拷問も死をもいとわないであろう。しかし万一、許しに値しない者であることが分かって、自分自身の品性の欠陥のゆえに生命を失うようなことがあれば、それは神の聖なるみ名を辱めることになってしまう。

彼らは、至るところに反逆の陰謀を聞き、暴動が起きるのを目撃する。そして彼らの心の中には、この大なる背教が終わるように、悪しき者のよこしまな行為が終わるようにという強烈な願望と熱望が起こる。しかし、彼らが、反逆の活動をとどめるよう神に祈っていながらも、自分自身には悪の大きな潮流に抵抗する力も押し返す力もないことを感じて、激しい自責の念にかられる。もし彼らが、彼らの全能力を常にキリストの奉仕に用いていたならば、そして力から力へと進んでいたならば、サタンの勢

力はこれほど優勢な力をもって襲ってはこないだろうと、彼らは感じるのである。

金は火で練られる

彼らは、神のみ前で心を悩まし、彼らの数々の罪に対するこれまでの悔い改めを指し示し「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」という救世主の約束を請い求める（イザヤ 27:5）。彼らの信仰は、祈りがすぐに答えられないからと言って、放棄されるようなことはない。激しい不安、恐怖、困惑に苦しみながらも、彼らは祈り求めることをやめない。あたかも、ヤコブが天使をつかまえて離さなかったように、彼らは神の力をしっかりとつかんで離さない。そして、「わたしを祝福してくださらないなら、あなたを去らせません」と彼らは心の中で叫ぶのである。

もしヤコブが、欺瞞によって長子の特権を

得た罪をあらかじめ悔い改めていなかったならば、神は、彼の祈りを聞き、あわれみをもって彼の生命を保つことをなさらなかったであろう。そのように、悩みの時においても、神の民は、恐怖と苦悩にさいなまれているとき、まだ告白していない罪を思い出すならば、彼らは圧倒されてしまうことであろう。絶望が彼らの信仰を断ち切り、彼らは、神に救いを求める確信が持てなくなることであろう。しかし、彼らは、自分たちが無価値なことを深く感じてはいるが、告白すべき罪を隠してはいない。彼らの罪は、前もってさばかれ、消し去られている。彼らは罪を思い出すことができない。

神は人生の小さなことにおける不忠実を見逃されると、サタンは多くの者に思い込ませている。しかし主は、ご自分が、悪を是認することも大目に見ることもなされない方であることを、ヤコブの取り扱いにおいて示された。罪の言い訳をしたり、隠したりして、それを告白せ

ず、許しを得ないまま天の記録に残しておく者はみな、必ずサタンに打ち負かされるのである。口でりっぱなことを言い、栄誉ある高い地位を占める者であればあるほど、その人々の行動は、神の目には嘆かわしいものであり、大いなる敵サタンの勝利はいっそう確実なのである。神の日に対しての準備を怠る者は、この悩みの時やそれ以後においては、準備することができない。こうした人々は、すべて絶望である。

何の準備もせずに、最後の恐るべき争闘に当面するこれらの自称キリスト者たちは、その時には絶望のあまり激しい苦悶の叫びをあげて、彼らの罪を告白する。そして悪人たちは、彼らの苦悩をながめて勝ち誇るのである。このような告白は、エサウやユダの告白と同じ性質のものである。このように、罪そのものではなく、単に罪の結果について悲しむ者は、真実の悔い改めをしておらず、また、悪に対して嫌悪の念を持たない者である。彼らは、刑罰を恐れて罪

を認めるのである。そして、昔のパロのように、刑罰が取り除かれるとまた天に反抗するのである。

ヤコブの生涯はまた、欺かれ、試みられ、罪に陥れられても、真に悔い改めて神に立ちかえる者を、神は見捨てられないという保証でもある。サタンは、この種の者を滅ぼそうとするが、神は天使を遣わして、危機の時に彼らを慰め、保護なさるのである。サタンの攻撃は、激烈で断固たるものであり、その欺瞞は恐るべきものである。しかし、神の目はその民の上に注がれ、その耳は彼らの叫びに傾けられる。彼らにとって、その悩みは激しさを極めたものであり、苦難の炉の炎は、まさに彼らを焼き尽くそうとするけれども、金を吹き分ける者であられる神は、彼らを火で練った精金として取り出される。この最も激しい試練のときにおける、神のその子供たちに対する愛は、彼らの最も輝かしい繁栄の時と同じように、強く、やさしいので

ある。しかし、彼らは、火の炉の中に投げ入れられる必要がある。キリストの姿が完全に反映されるように、彼らの世俗的なところが焼き尽くされねばならない。



我々に必要なもの

今や我々の目の前にある困惑と苦悩の時は、疲労と遅延と飢えに耐えることのできる信仰、すなわち、激しく試みられても落胆しない信仰を必要とする。その時に備えるために、すべての者に恩恵期間が与えられている。ヤコブが勝利したのは、彼が断固として屈しなかったからである。彼の勝利こそは、しきりに願い求める祈りに力があるということの実証である。彼

のように神の約束をしっかりとつかみ、彼のように熱心で忍耐強い者はみな、彼が勝利したように勝利するのである。自分を捨て、神の前で心を悩まし、神の祝福を求めて熱心に祈り続けようとしなない者は、それを受けることができない。祈りによる神との格闘—このことを知っている人が何と少ないことであろう。熱烈な願いをもって、心から神によりすがり、全力を注ぎ出す人が何と少ないことであろう。嘆願者の上に、言葉では言い表すことができない絶望の波が押し寄せるとき、確固不動の信仰をもって神の約束にすぎる者が、何と少ないことであろう。

現在、ほんのわずかの信仰しか働かせていない者は、悪魔的欺瞞の力と良心を強要する国家の法令の下に屈してしまう危険が多分にある。そして、たとえ彼らが試練に耐え得ても、常に神に信頼する習慣を養ってこなかったために、悩みの時には、さらに大きな苦難と苦悩に陥ることであろう。彼らは、自分たちが学ぶことを

怠っていた信仰の教訓を、恐るべき失望落胆の中であって学ばなければならなくなる。

我々は今、神の約束を試すことによって、神をよく知らなければならぬ。誠実で熱心なすべての祈りを、もれなく天使は記録している。

我々は、神との交わりを怠るよりも、利己的な満足を求めることをやめるべきである。神の是認の下にある最



低の貧困、最大の自己犠牲は、是認のない富、栄誉、安楽、友情にまさっている。我々は、祈りの時間を持たなければならない。もし、我々が、世俗のことに心を奪われているならば、神は、我々の偶像である財産、家屋、肥えた土地などを我々から取り去ることによって自己を反省する時間をお与えになるかもしれない。

もし青年が、神の祝福を求めることができる道のほかには、どんな道に入ることをも拒むならば、罪に誘われることはない。世界に最後の厳粛な警告を伝える使命者たちが、冷淡で無気力で怠惰な態度でなくて、ヤコブのように、熱心に、信仰をもって神の祝福を祈り求めるならば「わたしは顔と顔をあわせて神を見たが、なお生きている」と言うことのできる多くの場所を見いだすであろう（創世記 32:30）。天は彼らを、神と人との勝つ力を持った王子たちと見なすのである。

準備するのは今

「かつてなかったほどの悩みの時」が、間もなく我々の前に展開する。それだから我々には、一つの経験—今我々が持つておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験—が必要なのである。現実の困難というものは、予想したほ

どではないということがしばしばある。しかし、我々の前にある危機の場合は、そうではない。どんなに生々しく描写しても、この試練の激しさには到底及ばない。この試練の時に、すべての人間は、自分で神の前に立たなければならない。「主なる神は言われる、わたしは生きていて、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにも、彼らはそのむすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである」(エゼキエル 14:20)。

今、我々の大祭司が我々のために贖いをしておられる間に、我々はキリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人の心の中に、何らかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンは、それを用いて誘惑の力を表す。しかし、キリストはご自身について、「この世の君が来る……。だが、彼はわたしに対して、なんの力

もない」と宣言された（ヨハネ 14:30）。すなわちサタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させる何のすきも見つけることができなかつたのである。キリストは天父の戒めを守られた。そしてサタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかつた。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである。

我々が、キリストの贖罪の血を信じることによって、罪を捨て去らなければならないのは、現世においてである。いつくしみ深い救い主は、我々が彼と結合して、我々の弱さを彼の強さに、我々の無知を彼の知恵に、我々の無価値を彼の功績に結びつけるように招いておられる。神が摂理的に与えられる経験は、我々がイエスの柔和と謙遜を学ぶ学校である。神は我々の前に、我々が選ぶ安易で楽しく思われる道ではなくて、人生の真の目的を常に置かれる。我々の品性を天の型に形造るために神が用いられる手段

に、我々は協力しなければならない。このことを怠ったり、遅らせたりする者は、必ず魂を最も恐ろしい危険にさらすことになるのである。

最後を飾る大欺瞞

使徒ヨハネは幻の中で、大きな声が天でこう叫ぶのを聞いた。「地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が、自分の時が短いを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」(黙示録 12:12)。このような叫びを天において叫ばせる光景は、実に恐怖すべきものである。サタンの怒りは、彼の時が短くなるにつれて増し加わり、欺瞞と破壊の働きは、悩みの時に最高潮に達する。

間もなく、恐るべき超自然的な光景が、不思議と奇跡を行うサタンのしるしとして天に現れるであろう。悪霊たちは地の王たちのところと全世界とに出て行って、彼らを欺瞞の中に閉じ

込め、天の統治に対するサタンの最後の争闘に加わるように強要する。これらの手先によって、民もその支配者も一様に欺かれる。自分はキリストであると称する者たちが現れ、世の贖い主のものである称号と礼拝を要求する。彼らは、さまざまな驚くべきいやしの奇跡を行い、天から啓示を受けたと公言する。しかし、彼らの啓示は神のみ言葉の証とは相反するものである。

欺瞞の一大ドラマの最後を飾る一幕として、サタンはキリストを装うであろう。教会は長い間、キリストの来臨を、教会の希望の完成として待ち望んでいると公言してきた。今や大欺瞞者は、キリストがおいでになったように見せかける。世界の各所において、サタンは、黙示録の中でヨハネが述べている神のみ子についての描写に似た、まばゆく輝く威厳ある者として人々の中に現れる（黙示録 1:13-15 参照）。彼を取り巻いている栄光は、これまで人間の目が見たどんなものも及ばない。「キリストがこら

れた、キリストがこられた」と言う勝利の叫びが、空中に鳴り響く。この時、人々がひれ伏して彼を拝すると、彼はその両手



をあげて、キリストが地上におられた時に弟子たちを祝福されたように、彼らを祝福する。彼の声は実に柔らかく穏やかで、しかも美しい調べに満ちている。優しい同情のこもった調子で、彼は、かつて救い主が語られたのと同じ祝福に満ちた天の真理を幾つか述べる。彼は、人々の病をいやし、それから、いかにもキリストらしく見せかけながら、安息日を日曜日に変更したことを主張し、すべての人に対して、自分が祝福したこの日を聖く守るように宣言する。彼は、あくまでも第七日をきよく守り続ける者は、光と真理とをもって彼らのもとに遣わされたわたしの天使たちの言うことを聞かないで、わたし

の名を冒^{ぼうとく}流している者だと宣言する。これは強力な、ほとんど圧倒的な惑わしである。魔術師シモンに欺かれたサマリヤ人のように、多くの人々は、小さい者から大きい者にいたるまで、これらの魔術に心を奪われて、この人こそは『大能』と呼ばれる神の力』であると言う（使徒行伝 8:10）。

しかし、神の民は欺かれない。この偽キリストの教えは聖書と一致していない。彼の祝福は、獣とその像を拝む者、すなわち、神の混じりけのない怒りがその上に注がれると聖書が断言しているその人々に対して、宣言されているからである。

さらに、サタンにはキリストの再臨の光景をまねることは許されていない。救い主はあらかじめこの事に関する欺瞞行為をご自分の民に警告し、再臨の光景をはっきりと予告された。「にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選

民をも惑わそうとするであろう。……だから、人々が『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな。ちょうど、いなづまが東から西にひらめき渡るように、人の子も現れるであろう」(マタイ 24:24-27,31;25:31、黙示録 1:7、Iテサロニケ 4:16,17 参照)。この来臨はまねることが不可能である。それは世界中に知られ、全世界の人々が目撃するのである。

危機迫る

聖書を熱心に研究し、真理の愛を受けた者だけが、世界をとりこにする強力な惑わしから守られる。聖書のあかしによって、これらの者は欺瞞者サタンの変装を見破る。すべての人に試みの時がやってくる。試みを通してふるいにかかけられ、本物のキリスト者が明らかにされる。神の民は、自分の感覚的証拠に屈しないほど、

今神のみ言葉に固く立っているだろうか。こうした危機においても、彼らは聖書に、しかも聖書だけにすがりつくだろうか。サタンは何とかして、彼らがその日に立つ準備をするのを妨げようとする。サタンは彼らの道をふさぎ、この世の宝で彼らを迷わせ、重く疲れさせる荷を負わせて、その心をこの世の煩いでいっぱい満たし、試みの日が盗人のように彼らを襲うようにと、事を運ぶであろう。

キリスト教国におけるさまざまな為政者たちが、戒めを守る者たちを抑圧するために出した法令によって、政府の保護が取り除かれ、彼らが彼らの滅亡を望む者たちの手にまかされると、神の民は都市や村から逃れ、群れを作って最も荒れ果てた寂しい場所に住む。多くの者は山のとりでに



避難所を見つける。昔、ピエモンテの溪谷に隠れたキリスト者たちのように、彼らは地の高い所を隠れ家とし、岩のとりでを神に感謝する（イザヤ 33:16 参照）。しかし、あらゆる国の、あらゆる階級の人々が、身分の高い者も低い者も、富める者も貧しい者も、人種の別なく、多くの者が最も不当で残酷な囚われの身に突き落とされる。神に愛されている者たちが、鎖につながれ、牢獄の格子の中に閉じ込められ、死刑の宣告を受ける。ある者たちは、暗く不潔な牢獄につながれ、餓死するままに放置されているように見える。彼らのうめきを聞く人間の耳はなく、彼らを助けようとする人間の手はない。

この試みの時に、神は、ご自分の民をお忘れになるであろうか。神は、洪水前の世界に刑罰が下ったときに、忠実なノアをお忘れになっただろうか。平地の町を焼き尽くすために天から火が降ったとき、神は口をお忘れになっただろうか。エジプトで偶像礼拝者たちに囲ま

れたヨセフをお忘れになっただろうか。イゼベルがエリヤをバアルの預言者と同じ運命にすると誓って彼を脅かしたとき、神はエリヤをお忘れになっただろうか。神は、牢獄の暗く陰うつな穴に投げこまれたエレミヤをお忘れになっただろうか。火の炉の中の三人を、あるいはライオンの穴の中のダニエルを、お忘れになっただろうか。



「シオンは言った、『主はわたしを捨て、主はわたしを忘れられた』と。『女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあるか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない。見よ、わたしは、たなごころにあなたを彫り刻んだ。……』」（イザヤ 49:14-16）。

万軍の主は言われた、「あなたがたにさわる者は、彼の目の玉にさわるのである」（ゼカリヤ 2:8）。

敵が彼らを牢獄に投げ入れたとしても、獄屋の門は、彼らの魂とキリストとの交わりを遮断することはできない。彼らのあらゆる弱さを見、あらゆる試みを知っておられるお方は、地上のすべての権力にまさっておられる。そして天使たちは寂しい獄中に彼らを訪れ、天来の光と平安とをもたらす。牢獄も宮殿のようになる。信仰に富む者がその場所にいるため、パウロとシラスが深夜ピリピの牢獄で、祈りと讃美の声をあげたときのように、陰うつな壁も天来の光をもって照らされる。

恐るべき災い

神の民を圧迫し滅ぼそうと計る者たちの上に、神の刑罰が下る。悪人に対して神が長く

忍耐されたので、人々は大胆に罪を犯している。しかし、彼らに刑罰が下るのが長い間延ばされているということは、その刑罰が確実なものではないとか、恐るべきものではないという理由には決してならない。「主はペラジム山で立たれたように立ちあがり、ギベオンの谷で憤られたように憤られて、その行いをなさる。その行いは類のないものである。またそのわざをなされる。そのわざは異なったものである」(イザヤ 28:21)。あわれみ深い我らの神にとって、罰するということは異なったわざである。「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない」(エゼキエル 33:11)。主は「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、……悪と、とがと、罪とをゆるす者」である。しかし主は、「罰すべき者をば決してゆるさず」、「主は怒ることおそく、力強き者、主は罰すべき者を決してゆるされない者」である(出エジプト 34:6.7、ナホム 1:3)。主は、

踏みにじられたご自分の律法の權威を、義の恐るべきわざによって擁護される。神の律法を犯した者に対する報復がいかにかに厳しいものであるかは、神が刑罰の執行をするのに気が進まれないことによってもわかる。神が長く忍ばれ、かつ彼の御目に罪の升目が満たされるまではお打ちにならない国民も、最後にはあわれみの混じらない怒りの杯を飲みほさなければならない。

キリストが聖所における彼の執り成しをやめられるとき、獣とその像とを拝し、その刻印を受ける者たちに対して警告された、混ぜもののない怒りが注がれる（黙示録 14:9,10 参照）。神がイスラエルを救い出そうとされたとき、エジプトに下った災いは、神の民の最後の救出の直前に世界に下るもっと恐ろしく、もっと広範囲に及ぶ刑罰と類似した性格のものであった。黙示録の記者は、その恐るべき災いを描写して、次のように言っている。「獣の刻印を持つ人々と、その像を拝む人々とのからだに、ひどい悪

性のでき物ができた。」「海は死人の血のようになって、その中の生き物がみな死んでしまった。」「川と水の源と(は)……みな血になった。」このような刑罰は恐ろしいものではあるが、神の正義は完全に擁護されるのである。神のみ使いは次のように叫ぶ。「このようにお定めになったあなたは、正しいかたであります。聖徒と預言者との血を流した者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことであります」(黙示録 16:2-6)。彼らは、神の民を死に定めることによって、彼ら自身の手で血を流したのと全く同じ罪を犯したのである。同様にキリストも、その時代のユダヤ人に対し、アベルの時からすべての聖徒たちの血を流した罪があると宣言された。それは、彼らが、預言者たちを殺した人々と同じ精神を持ち、同じことをしようとしていたからである。

それに続く災いについて、「太陽は火で人々を焼くことを許された。人々は、激しい炎熱

で焼かれた」(同
16:8,9)。この恐
怖すべき時におけ
る地上の状態を、
預言者は次のよう
に描写している。
「地は悲しむ。こ



れは穀物が荒れはて……るためである。……野
のすべての木はしぼんだ。それゆえ楽しみは人
の子らからかれうせた。」「種は土の下に朽ち、
倉は荒れ……る。……いかに家畜はうめき鳴く
か。牛の群れはさまよう。彼らには牧草がない
からだ。……水の流れがかれはて、火が荒野の
牧草を焼き滅ぼしたからである。」「『その日
には宮の歌は嘆きに変り、しかばねがおびただ
しく、人々は無言でこれを至る所に投げ捨てる』
と主なる神は言われる」(ヨエル 1:10-12,17-
20、アモス 8:3)。

神の保護の約束

これらの災いは、全世界的なものではない。さもないと、地上の住民は全く滅ぼされてしまうであろう。しかし、それでもこれは、人類史上かつてなかった恐ろしい災いである。恩恵期間の終了する前に人々の上に下った刑罰には、あわれみが混じっていた。キリストの執り成しの血潮によって、罪人はその罪と同等の罰を受けることから守られていた。しかし、最後の刑罰の時には、あわれみを混じえずに怒りが注がれるのである。

その日、多くの人々は、長い間軽蔑してきた神のあわれみの保護を受けたいと願う。「主なる神は言われる、『見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくのもない、主の言葉を聞くことのききんである。彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへは

せまわる、しかしこれを得ないであろう』(アモス 8:11,12)。

この時、神の民は苦難を免れるわけではない。彼らは迫害と苦しみに会い、窮乏に耐え、食物の不足に苦しむのであるが、滅びるままに放っておかれたりはしない。エリヤを守り養われた神は、自己犠牲を払うご自分の子らを一人として見過ごしになさることはない。彼らの

髪の毛までも数えられる神は、彼らを保護し、飢饉の時にあってさえ彼らの必要を満たされるのである。悪人たちが飢饉と疫



病のために死んでいくときにも、天使たちは義人を守り、その必要を満たす。「正しく歩む者」には、次のような約束が与えられている。「そのパンは与えられ、その水は絶えることがな

い。」「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがない」(イザヤ 33:15,16;41:17)。

「いちじくの木は花咲かず、ぶどうの木は実らず、オリーブの木の産はむなしくなり、田畑は食物を生ぜず、おりには羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる。」しかし、主を恐れる者たちは、

「主によって楽しみ、わが救の神によって喜ぶ」(ハバクク 3:17,18)。「主はあなたを守る者、主はあなたの右の手をおおう陰である。昼は太陽があなたを撃つことなく、夜は月があなたを撃つことはない。主はあなたを守って、すべての災を免れさせ、またあなたの命を守られる。」「主はあなたをかりゅうどのわなと、恐ろしい疫病から助け出されるからである。主はその羽をもって、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。そのまことは

大盾、また小盾である。あなたは夜の恐ろしい物をも、昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。また暗やみに歩きまわる疫病をも、真昼に荒す滅びをも恐れることはない。たとい千人はあなたのかたわらに倒れ、万人はあなたの右に倒れても、その災はあなたに近づくことはない。あなたはただ、その目をもって見、悪しき者の報いを見るだけである。あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、災はあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に近づくことはない」(詩篇 121:5-7;91:3-10)。

悩みの時の信仰

しかし、人の目から見ると、昔の殉教者たちのように、神の民も血をもってその証に印を押さねばならないかのように思われる。彼ら自身、主が彼らを離れて、彼らを敵の手に渡されたのではないかと恐れ始める。それは、恐ろ

しい苦悩の時である。彼らは、昼も夜も神に救いを叫び求める。悪人たちは勝ち誇り、あざけりの叫びをあげて、「おまえたちの信仰は、いったいどうなったのか。もしおまえたちが神の民であるならば、当然神は、我々の手からおまえたちを救い出すはずではないか！」と言うのである。しかし、待ち望む人々は、イエスがカルバリーの十字架上で死に瀕しておられたとき、祭司長や司たちがあざけり叫んで、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」と言ったことを思い起こすのである（マタイ 27:42）。すべての者はヤコブのように、祈りのうちに神と格闘している。彼らの顔は、内面の苦悩を表している。どの顔も青ざめている。それでも彼らは、熱烈な嘆願をやめないのである。

もし人々の目が開かれて、天の幻を見ることができたならば、力強い天使の一団が、キリス

トの忍耐の言葉を
守る者たちの回り
に駐屯ちゅうとんしているの
を見るであろう。
天使たちは、優し
い同情の念をもっ
て、彼らの悲痛な



ありさまを見つめ、彼らの祈りに耳を傾けるの
である。彼らは、人々を危機から救出せよとい
う指揮官の言葉を待っている。しかし、彼らは、
もう少し待たなければならない。神の民は、杯
を飲み、バプテスマを受けなければならない。
彼らにとっては非常な苦痛である遅延そのもの
が、彼らの懇願に対する最上の応答である。彼
らが主に信頼して、主がお働きになるのを待と
うとするとき、彼らは、これまで彼らの宗教経
験において、あまりにもわずかしか働かせてこ
なかつた信仰と希望と忍耐を働かせるように導
かれるのである。しかしそれでも、選民のため
に、悩みの時は短くされる。「まして神は、日

夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださら……（ない）ことがあるか。あなたがたに言うておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう」（ルカ 18:7,8）。終末は、人々が予期している以上に速やかに来る。麦は集められ束にされて神の倉におさめられ、毒麦は束ねられて滅亡の火に投げられるのである。

天使による守り

天の歩哨^{ほしやう}たちは、命じられた任務に忠実に服し、警戒を続ける。戒めを守る人々を死刑にするという全般的布告は、その日時を定めているにもかかわらず、敵は、ある場合には法令の時期を早めて、定められた時よりも前に彼らの命を取ろうとする。しかし、忠実な人々の周囲に駐屯している天使の警戒線を突破することは誰にもできない。中には、町や村から逃げる途中で襲撃される者たちもいる。しかし、彼らに向

かって振り上げられた剣は、折れてわらのように力なく落ちる。また戦士の姿をした天使たちによって守られる者もある。

いつの時代においても、神は、聖天使たちによって、神の民を救出し解放してこられた。天使たちは、人間の事柄に活発に関与してきたのである。彼らは、ある時は、いなずまのように輝く衣を着て現れ、ときには、旅人の身なりをした人間としてやって来た。天使たちは人間の姿をとって、神の人たちに現れた。あたかも疲れ果てた旅人のように、真昼にかしの木の下で休んでいたこともある。また人々の家庭でもてなしを受けたこともある。旅人の案内役を務めたこともある。彼らは、自分たちの手で祭壇の火を点じた。彼らは牢獄の戸を開き、神の僕たちを自由の身にした。また、彼らは天の武具を身につけて、救い主の墓から石を転がすためにやってきた。

天使たちは、しばしば人間の姿をとって、義

人たちの集まりの中にいる。また彼らは、ソドムにやって来たように、悪人たちの集まりを訪れて、彼らの行為を記録し、彼らが神の忍耐の限度を超えたかどうかを決定するのである。神はあわれみを喜ばれるゆえに、真心から主に仕えるわずかの者のために、災害を抑制し、多くの者の平穏な生活を引き延ばしておられる。神にそむく罪人たちは、自分たちがあざけり圧迫している少数の忠実な人々のおかげで、自分たちは生きていられるのだということに、少しも気づいていないのである。

この世の統治者たちは知らないでいるが、彼らの会議において、しばしば天使が演説者であった。人間の目が彼らをながめ、人間の耳が彼らの訴えを聞いた。人間のくちびるが彼らの提案に反対し、彼らの勧告をあざけた。人間の手が彼らを侮辱し乱暴を働いた。議会や裁判所において、これらの天使たちは、人類歴史に精通していることを示した。彼らは、最も有能

で最も雄弁な弁護者よりも巧みに、圧迫された人々のために訴えることができたのである。彼らは、神の働きをはなはだしく遅延させて、神の民を非常な苦しみに陥れるような策略を挫折させ、害悪を阻止した。危機と苦難の時に「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」のである（詩篇 34:7）。

神の民は、熱烈な渴望を抱いて、来たるべき彼らの王キリストのしるしを待ち望む。「今は夜の何どきですか」と、夜回りが問われると、何のためらいもなく「朝がきます、夜もまたきます」と答える（イザヤ 21:11,12）。山々の頂の雲間から光が洩れている。主の栄光が現れるのももうすぐである。義の太陽がまさに輝き出ようとしている。朝と夜が共に近づいている。それは、義人には、永遠の昼の開始であり、悪人には、永遠の夜の幕がおろされる。

神の民の勝利

祈りのうちに神と格闘している者たちが、神の前に嘆願していると、見えないものから彼らをさえぎっていた幕が、ほとんど除かれたように思われる。天は、永遠の日のあけぼのに輝き、「あなたがたの忠誠を保ち続けよ。援助は与えられる」という言葉が、天使の歌のメロディーのように耳に聞こえる。全能にして勝利者であるキリストは、永遠の栄光の冠を、ご自分の疲れた兵士たちの前にさし出される。そして開かれた門から、彼の声が聞こえてくる。「見よ、わたしはあなたがたと共にいる。恐れてはならない。わたしは、あなたがたのすべての悲しみを知っている。わたしは、あなたがたの悲しみをになった。あなたがたが戦っている敵は、わたしがすでに戦った敵なのだ。わたしはあなたがたのために戦った。そして、あなたがたは、わたしの名によって、勝ち得て余りあるのである。」

いつくしみ深い救い主は、我々が助けを必要とするちょうどその時に、助けをお送りになる。天に至る道は、彼の足跡によって清められ、我々の足を傷つけるとげは、どれも彼の足を傷つけたものである。我々が負わされる十字架は、すべて、我々に先だって彼が負われたものである。主は、魂に平和をもたらすための準備として、争闘が臨むことを許されるのである。悩みの時は、神の民にとって恐るべき試練ではあるが、それは、すべての忠実な信仰者にとって上を見上げて、主を取り巻く約束の虹を信仰によって見るべき時である。

「主にあがなわれた者は、歌うたいつつ、シオンに帰ってきて、そのこうべに、とこしえの喜びをいただき、彼らは喜びと楽しみとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。『わたしこそあなたを慰める者だ。あなたは何者なれば、死ぬべき人を恐れ、草のようになるべき人の子を恐れるのか。……あなたの造り主、主を忘れて、なぜ、

しえたげる者が滅ぼそうと備えをするとき、その憤りのゆえに常にひねもす恐れるのか。しえたげる者の憤りはどこにあるか。身をかがめている捕われ人は、すみやかに解かれて、死ぬことなく、穴にくだることなく、その食物はつきることがない。わたしは海をふるわせ、その波をなりどよめかすあなたの神、主である。その名を万軍の主という。わたしはわが言葉をあなたの口におき、わが手の陰にあなたを隠した』(イザヤ 51:11-16)。

「それゆえ、苦しめる者、酒にではなく酔っている者よ、これを聞け。あなたの主、おのが民の訴えを弁護されるあなたの神、主はこう言われる、『見よ、わたしはよろめかす杯をあなたの手から取り除き、わが憤りの大杯を取り除いた。あなたは再びこれを飲むことはない。わたしはこれをあなたを悩ます者の手におく。彼らはさきあなたにむかって言った、「身をかがめよ、われわれは越えていこう」と。そして

あなたはその背を地のようにし、ちまたのようにして、彼らの越えていくにまかせた』(イザヤ 51:21-23)。

神の目は、各時代を見通して、地上の権力の総攻撃が起こるとき神の民が直面しなければならない数々の危機に注がれる。彼らは、捕われた流浪の民のように、飢えや暴力によって死ぬのではないかとおののく。しかし、イスラエル人の前で紅海を分けられた聖なる神は、その大いなる力をあらわし、彼らを抑われの身から戻されるのである。「万軍の主は言われる、彼らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、わたしの宝となる。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ」(マラキ 3:17)。この時、キリストの忠実な証人たちの血が流されたとしても、それは、殉教者の血のように神のために収穫をもたらすためにまかれる種とはならないのである。彼らの忠誠は、他の人々に真理を悟らせる証と

はならない。なぜなら、強情な心は、寄せてくるあわれみの波を拒み続けて、それらが二度とかえって来ないようにしてしまったからである。今義人が、むざむざ敵の餌食^{えじき}になるならば、それは暗黒の君の勝利になってしまう。そこで詩篇記者は「主（は）悩みの日に、その仮屋のうちにわたしを潜ませ、その幕屋の奥にわたしを隠（される）」と言っている（詩篇 27:5）。キリストもまた言われた。「さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ。見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる」（イザヤ 26:20,21）。彼が来られるのを忍耐して待つ者たち、その名がいのちの書に記されている者たちの救出は、実に輝かしいものとなる。

もっと詳しく知りたい方のために、
大争闘小冊子シリーズの完全版

“キリストとサタンの大争闘”



E.G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁—聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com